

昔むかし、ある湖のほとりに、貧しいお百姓が、おかみさんと三人の息子といっしょに暮らしていました。やがて、お百姓とおかみさんが死んでしまうと、息子たちは、親たちの残してくれたものを分けることにしました。

いちばん上の兄さんは、

「ぼくは、この家をもろうよ」といって、家を自分のものにしました。二番目の兄さんは、

「じゃあ、ぼくは、家の中にある物をぜんぶもろうよ」といって、テーブルやいすやベッドを自分のものにしました。末っ子のペールは、

「じゃあ、ぼくは何をもらえばいいの」とたずねました。兄さんたちは、笑って、  
「そこらをさがして見つけたものをもらえばいいさ」といいました。でも、家にはもう何ひとつ残っていません。あちこちさがして、ようやく部屋の隅に、なわがぐるぐる巻いてあるのを見つけました。ペールは、

「これだって、いつかは役に立つさ」といって、なわをもらって、家を出ました。

やがて、湖のほとりまでやって来ると、ペールは、高い白樺の木のかげにすわって、これからどうやって暮らしていこうかと考えました。

ふと見ると、白樺の木のこずえに、りすが一匹、ちよこんとすわってこちらを見ていました。とたんにペールは、なわの使いみちを思いつきました。

(これでわなを作つてりすをつかまえて、その皮を売って暮らすことにしよう)

ペールは、わなをこしらえると、

「おい、ちびさん、こつちへおいで」と、りすに呼びかけました。りすは、あつというまにわなにかかつてしまいました。でも、りすがかわいい目で、びっくりしたようにこちらを見ているのを見ると、ペールは、殺して皮をはぐ気にはなれませんでした。そこで、木の枝でかごを作つて、りすを入れました。

「ちびさん、元氣を出せよ。じきに友だちを見つけてやるからな」

ペールが待っていると、まもなく、うさぎが一匹飛びだしてきました。ペールは、「ほいきた。そんなに速く走るなよ。待ってたんだよ」といいながら、わなを投げて、うさぎをつかまえました。そして、りすのかごに入れました。それから立ちあがると、もつと何かいないかと、湖の岸まで下りていきました。すると、やぶの中から枝のピシピシ折れる音が出て、大きくながりました。くまはペールに気付かず、大きな岩のかけにはいこみ、うつらうつら、ねむりはじめました。ペールは、

(あいつをつかまえるには、よっぽどじょうぶで長いつながるな)と考えました。そこで、なわをより合わせて太いつなを作りにかかりました。

ペールがつな作りに夢中になっているあいだに、この湖にすむ水の精ネックが、水の面に頭を出しました。そして、魚のような目で、ペールの様子をめずらしそうにながめました。ネックは、

(いったい、あれを何に使うんだろう) と思いました。そこで、湖の底にもどって行って、息子のネックに、

「あの少年が何をしているのか、きいておいで」といいつけました。息子のネックは、さっそく出ていきました。

ペールがふと目をあげると、目の前に小さな男の子が立っていて、じつところらを見ていました。頭には緑の藻をいっぱいつけて、ハスの葉っぱの服を着て、髪にきれいなハスの花をさしていました。

「ぼくらの湖のそばで、きみはいったい何をしているの」と、男の子はたずねました。ペールは、これはネックに違いないと思いました。もしそうなら、うまく返事をしないと、水の中に引きずりこまれてしまいます。そこで、ペールはいいました。

「湖をしばってやろうと思つてつなをこしらえているのさ。このつなができたなら、君たちの湖ももうおしまいだよ」

ネックの子は、急いで父親のネックの所に引き返していいました。

「湖をしばろうと思つて、つなをこしらえているんだって」

「なんだって。じゃあ、もういちど引き返していつて、あいつと木の登りっこをするんだ。そして、あいつがくたびれたところで、水の中に引きずりこむんだ」

ネックの子は、もういちど水から出てきて、ペールに、白樺の木を指さしていいました。

「ぼくと、この白樺の木に登りっこしないか。どっちが速く登れるか、競争しようよ」ペールは、

「ぼくは、今仕事があるから登れないな。でも、小さい弟がいるから、あいつに登らせよう」といいました。そして、かごの口を開けて、りすにいいました。

「おい、弟。出てきて、木の登りっこをしてごらん」

りすは、ひとはねしたかと思うと、ネックの子に登りだすひまもなく、もうつペンに着いていました。ネックの子はがっかりしてもどつていきました。そして、父親にいいました。

「あの子は仕事があるから登れないといって、代わりに小さい弟を登らせたの。そしてら、その子はずっとすばしっこくて、目にもとまらぬ速さでつペンまで登っちゃったんだ」

父親は、

「くよくよするな、ぼうや。もういちど引き返していつて、こんどは、かけっこをやつてごらん。おまえほど速くは走れやしない。あいつがくたびれたところで、水の中に引きずりこむんだ」

ネックの子は、もう一度出てくると、ペールに、

「ねえ、ぼくとかけっこをしないか」といいました。ペールは、

「おまえ、ぼくがいがしいのがわからないのか。でも、もうひとり弟がいるから、そいつにやらせよう」といいました。そして、かごの口を開けて、うさぎにいいました。

「おい、弟。出てきて、うんと速く走ってごらん」

うさぎは、とび出すと、走りに走って、ネックの子が走りだすひまもなく、たちまち姿が見えなくなってしまうました。ネックの子は泣きべそをかきながらもどつていききました。父親は、

「もういちどだけ試してみるんだ。あいつを片付けないと危険だからな。こんどは、相撲を取ってごらん。まさかおまえほど強くはないだろう。あいつを負かして湖につき落としてやれ」といいました。

ネックの子はまた出てきて、ペールに、

「ねえ、ぼくと相撲を取ろう」といいました。ペールは、

「ぼくには、そんなひまはないっていつてるだろう。でも、ほんとにやりたいんなら、あそこにぼくのおじいさんが寝ているから、やってごらん。先に耳をボインとぶって、起こしてやるといいよ」といって、岩かげで寝ているくまを指さしました。ネックの子は、くまの所に行って、

「相撲を取らないか」とききました。くまは寝返りを打っただけで、起きません。そこでネックの子は、くまの耳をボインとぶちました。くまは怒って起きあがり、前足でネックの子の肩を力いっぱいなぐりつけました。ネックの子は思わずひざをついてしまいました。やつとのこと湖の底に逃げかえると父親にいいました。

「おお、こわかった。とてもあの子には勝てないよ。弟たちはあんなに小さいのに、木登りもかけっこも速いし、おじいさんは年をとっていてあんなに眠そうなのに、ひと打ちでぼくをころばしたんだ。あの子が自分で出てきたら、どれほど強いかわからないよ」父親は、

「それじゃあ、うまくやらないと、わしらは家も命もなくしてしまうかもしれん。もういちどあいつの所に行って、金をいくら出したら、湖をそつとしておいてくれるか、きいてきてくれ」といいました。

ネックの子は、またまた出てきました。ペールは、恐い顔をして、

「また来たな。まだやる気か」といって、そでをまくり上げました。ネックの子はあわてて、

「いいえ、ちがうんです」とさげばしました。「こんどは、お金をいくら出したら、湖をつなでしばらないでくれるか、ききにきたんです」

ペールは、

「それなら、話は別だ。ぼくの帽子いっぱいの金貨でどうだい」と答えました。ネックの子は、

「それくらいならいいと思う」といって、もどつていきました。

ペールは急いで、自分の帽子に大きな穴を開けました。そして、地面に深い穴を掘り、その上に帽子を乗せました。そこへ、ネックの子が、重い金貨の袋を背負って、よちよちやって来ました。それから、金貨を帽子のなかへ入れはじめました。ところが、帽子がいつぱいになったら残りは持つてかえるつもりだったのに、いくら入れても帽子はい

つぱいになりません。ぜんぶ地面の穴の中に落ちてしまったのですが、ネックの子は気がつきませんでした。ペールは、

「これっぽっちじゃ、帽子の底がかくれたただけだ。帽子いっぱいの約束だぞ」といいました。

ネックの子は、もういちど湖の底に引き返しました。父親が、

「残りの金は持つてかえつて来ただろうな」ときくと、ネックの子は、

「ううん。まだ足りないの。やっと帽子の底がかくれたただけなもの」と答えました。そこで、父親は、もっと大きな金貨の袋を出してきて、

「これだけで許してくれっていうんだよ。これで有り金ぜんぶだからな」といって、ネックの子にわたしました。

ネックの子は、重たい袋を引きずつてきてペールの前に置くといいました。

「ねえ、これがかんべんしておくれよ。うちにあるお金をぜんぶ持ってきたんだもの」

ペールは、

「しかたないな。かんべんしてやるよ。湖はそつとおいてやるう」といいました。

ネックの子はほつとして、湖の底にもどつていきました。

ペールがたくさんの金貨を持つてうちに帰ると、兄さんたちはあきれかえつて、

「どうやってこれだけの金貨を手に入れたんだ」とたずねました。

「兄さんたちの残してくれたなわで、りすなんかの動物をつかまえて、それでもうけたのさ」と、ペールは答えました。兄さんたちは、

「家も家の中の物も、みんなお前にやるから、どうかそのなわをゆずつてくれないか」とたのみました。

「いいよ」

ペールが承知すると、兄さんたちはなわを持つて、喜び勇んで家を出ていきました。ふたりはたぶん今でも、なわを持つて動物たちを追いかけ回していることでしょう。

ペールは、貧しい小さい家の代わりになりっぱな大きな家を建て、広い土地の持ち主になつて、末永く幸せに暮らしたということです。

おしまい